

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成30年4月23日(第40号)

発行：島田療育センターはちおうじ

「いのちの授業」を行ってみて、まず浮かんだのは母のことでした。母の死はあまりにも突然でした。感謝の言葉を伝える機会もないまま、天国に逝ってしまいました。

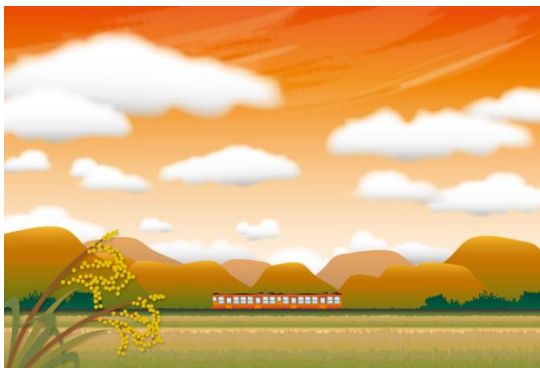
「いのちの授業」で一番勉強させてもらったのは私だったのかもしれませんが。

平成24年4月に旅立っていった我が母のことを紹介します(2)。

所長 小沢 浩

～ どん底から ～

日本にたどりついてから、家族は祖父の実家を頼って徳島に行った。祖父の実家は造り酒屋。実家が住むところを用意してくれた。仕事がないと生活ができない。祖父は学校で教師を始めた。祖父は何でも知っていて「歩く辞書」と地元では言われていた。それが母の自慢であった。教師の給料だけでは生活は苦しかった。祖母は、熊本の士族の生まれであった。目が見えなかったため、お金を稼ぐことはできない。母は洋裁を習い洋服を作って家計を支えた。お祭りの時には必ず参加し、



どんな服を着ているか観察し洋服づくりの参考にした。何とか妹たちを大学に行かせようと必死に働いた。そんな母の唯一の楽しみは、ラジオから流れる流行歌を広告の裏紙に書き写すことであった。妹のうちの一人は、徳島県で二番になったこともあるほど勉強ができた。でもお金がないため短大しか行かせることしかできなかった。それが母は悔しくてたまらなかった。しばらくして、祖父は亡くなってしまった。心臓発作による突然の死。あまりにも突然だった。

祖父が亡くなってからというもの、生活は更に厳しくなった。家族は知人を頼り、静岡の富士宮に移り住んだ。母は営林署に勤めた。営林署では調理場で働いた。そこで調理師の免許をとった。給料はすべて家に入れ、家族のために働いた。しかし、妹たちは高校

までしか通わせることができなかつた。出張のときに帰りのバス代がなく、2時間以上かけて暗い夜道を一人で歩いて帰ったこともあった。

結婚する気はなかった。しかし、周囲は縁談を勧めてくる。妹たちも一段落した。あまりにまわりがうるさいので、誰かと結婚しなければと半ばあきらめにも近い気持ちで考え出した。

いくつか話が合った中で、母はこの貧乏のどん底から抜け出すには学問しかないと考えた。子どもは「歩く辞書」といわれていた祖父のようになってほしい。そのためには、勉強ができるに越したことはない。そう思った母が選んだのは茂夫、すなわち父であった。



父は、茨城の農家の家に生まれた。父方祖父は、それは厳しくて頑固だった。息子たちはずっと農作業を手伝っていた。怒られるときは、火鉢が飛んできてやけどをしたり、庭の木に1日縛られていたこともあった。祖母が夜中に祖父の目を盗んでおにぎりを持ってくる。それがばれると祖母が殴られる。農家に学問はいらぬと勉強をしていたら怒られた。だから祖父の目を

盗んで夜中に勉強をした。勉強は中学で1番であった。そのため、担任が父を高校に通えるように何回も頼みに来た。何回も何回も通いつめたため、祖父はとうとう農業高校ならば仕方がないとしぶしぶ高校行きを認めた。父は、高校を卒業すると営林署の試験を受けた。戦後まもなくであったため、国有林はまだ御用林と呼ばれていた。試験は宮内庁で行われ、数百人の中から2名だけ合格することができた。その中の一人が父であった。

仕事はできたがとにかく酒を飲んだ。浴びるほど飲んだ。給料のほとんどを酒に費やし、いきつけの飲み屋によくツケをしていた。そんな茂夫をよくいうものは少なかった。

頭はいい。でも苦勞はするだろう。それを覚悟の上で結婚を決めた。不思議なことに今まで茂夫のことを悪くいうものも多かったが、結婚が決まるとピタッとそんなうわさが聞こえなくなった。



『奇跡がくれた宝物』
小沢浩 著

クリエイツかもがわ
より発売中